

蟹江城と蟹江合戦

(1) 蟹江城とは？

現在の蟹江町城一丁目には、蟹江城があったことをご存知だろうか。かつての蟹江は南部が伊勢湾に面する、水上交通の要衝地であった。

蟹江城については、残念ながらその全容を明らかにする史料は残されていないが、伝承によれば次のとおりである。

永享年間（1429～41）に北条時任が蟹江に砦を築いたことに始まる。その後、尾張国の守護であった斯波氏が城郭として整備し、天文年間（1532～55）には渡辺源十郎・与三郎親子が支配したとされる。永禄年間（1558～70）には織田信長の勢力下に入り、信長は配下の滝川一益に命じて改築をさせている。その後、天正11年（1583）には佐久間正勝（信栄）が城主となる。

この頃には蟹江城も整備が進み、三の丸まで有する城となっていた。本丸の大きさは東西五十四間（約98m）、南北五十間（約90m）。城の南側には海門寺口という大手門、東側には前田口という門を備え、周囲を三重の堀で囲まれていたとされる。さらに、蟹江城の周辺にも前田城や大野城、下市場城という小さな城が築かれ、蟹江城を守るように配置された。このことから、当時の蟹江一帯がいかに重要な場所であったのかは、想像に難くない。

蟹江城をめぐる戦いは何度かあったと記録されているが、なかでも天正12年（1584）に織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉の配下・滝川一益軍との間で行われた戦いは「蟹江合戦」として、後世に伝わっている。



(2) 蟹江合戦

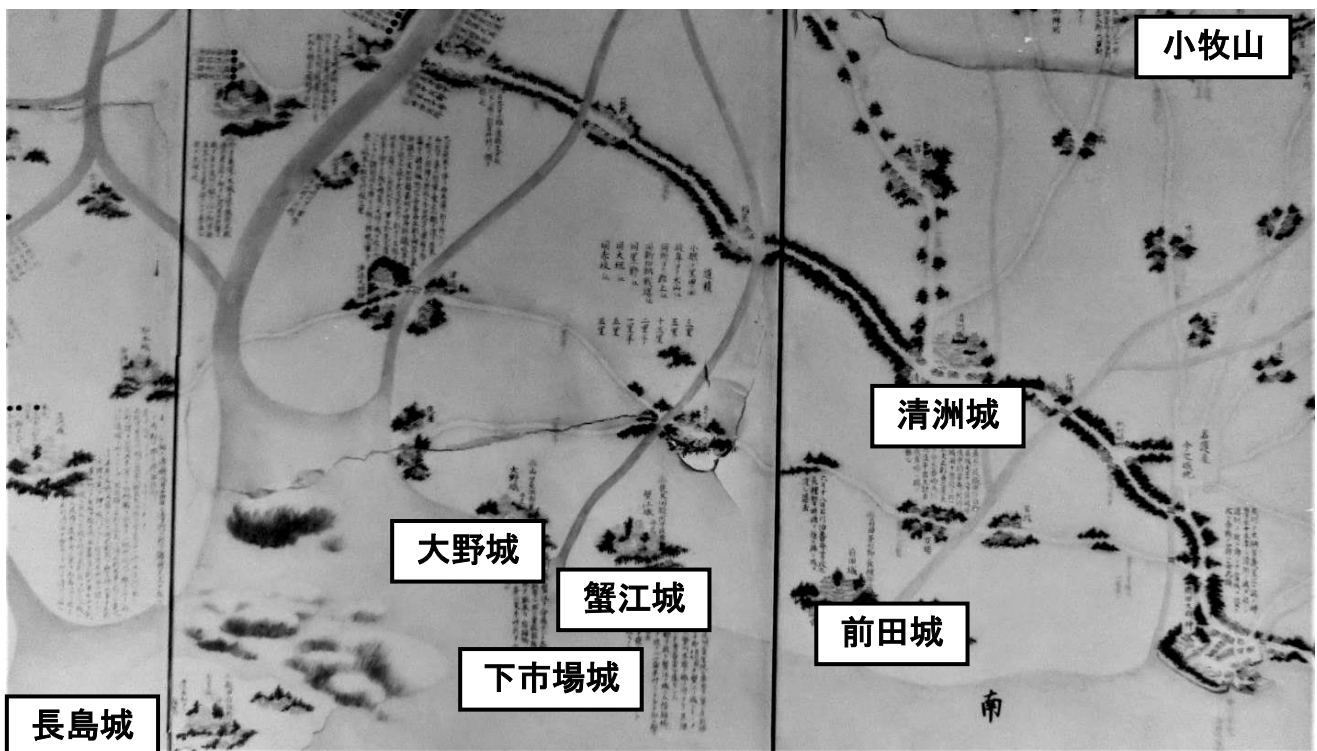
1 蟹江合戦までの経緯

「蟹江合戦」とは、天正12年(1584)6月に起きた織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉軍配下の滝川一益軍との戦いであり、「小牧・長久手の戦い」に含まれる。

蟹江合戦が起きるまでの経緯は、少々複雑である。天正10年(1582)、織田信長が家臣の明智光秀に討たれる「本能寺の変」が起き、信長の嫡男・信忠も京都で自刃した。その後、光秀が羽柴秀吉により討たれると、織田家では信長の後継者を誰にするか、話し合うこととなった。これが「清洲会議」である。当初は秀吉が推薦する信長の次男・信雄と柴田勝家が推薦する三男・信孝のどちらを擁立するかで対立するが、最終的には嫡男・信忠の子である三法師を擁立することで合意した。

しかし、結局対立は解消されず、天正11年(1583)には羽柴秀吉・織田信雄連合軍と柴田勝家・織田信孝連合軍が戦う「賤ヶ岳の戦い」が起こる。この戦いでは秀吉・信雄連合軍が勝利するが、この戦いの後から、信雄は日増しに勢力を強めていく秀吉との対立を深めていくことになる。

そして天正12年(1584)、ついに信雄は父・信長の盟友であった徳川家康の助力を受け、秀吉に対して挙兵する。これが「小牧・長久手の戦い」である。信雄・家康連合軍が小牧・長久手方面での戦いを有利に進める一方、秀吉は戦況打開の一手として配下の滝川一益へ蟹江攻略を命じた。



蟹江城周辺の立地 『四戦場之図屏風』(江戸時代後期)をもとに作成

2 蟹江攻略の理由

秀吉が蟹江を攻略しようとした理由は、大きく2つある。1つ目は蟹江が伊勢湾一帯の水上交通の要衝地であったこと、2つ目は信雄と家康の連携を断つことである。「小牧・長久手の戦い」の際、信雄の本拠地は長島にあり、家康は岡崎より出陣して清洲城にいた。この中間地点に位置する蟹江を攻略することで、水上交通を抑えるとともに、信雄と家康を分断しようとしたのである。

当然ながら信雄・家康連合軍も蟹江城の重要性を承知していたため、信雄は配下である佐久間正勝に蟹江城を守らせていた。

3 蟹江城をめぐる戦い

天正12年(1584)6月、蟹江城主・佐久間正勝が敵を攻撃するために蟹江城を留守にした隙をついて、滝川一益は九鬼嘉隆と共に海上から奇襲し、蟹江城占領に成功する。この奇襲の裏には、城主不在の城を守るべき正勝の家臣・前田種利による秀吉への内応があった。さらに種利の息子が守る前田城と、種利の弟が守る下市場城(下島城)も秀吉へ寝返り、占領した蟹江城の守りを固めた。

蟹江城占領に成功した滝川一益であったが、奇襲した際に潮位・潮流に阻まれたのか、籠城するために必要な武器や食糧を十分に運び込むことができなかった。さらに蟹江城の西方を守る大野城主・山口重政は秀吉へ寝返ることを拒み、蟹江城内では鈴木重安・重治兄弟も抵抗した。

一方、蟹江城陥落の知らせを受けた信雄と家康は、蟹江城の奪還を図るべく、直ちに蟹江へ集結した。こうして蟹江城をめぐる戦いの火蓋が切って落とされたのである。

当初は奇襲作戦により成功するかに思われた蟹江攻略であるが、前述した大野城主・山口重政や鈴木兄弟による抵抗のほか、数で勝る信雄・家康連合軍の反撃により、滝川一益は苦戦を強いられることとなる。そして2週間にも及ぶ籠城戦の末、とうとう蟹江城は陥落し、信雄・家康連合軍は蟹江城の奪還に成功するのである。

4 蟹江城の終焉

蟹江合戦の後、信雄と秀吉は和議を結んだため、蟹江城が修復されることはなかった。そして翌年の天正13年(1585)の大地震により、壊滅したといわれる。また一説によれば、家康によって城跡は宅地や田畑として整備された、ともされる。

江戸時代になると、「蟹江合戦」はさまざまな文献でも取り上げられることとなる。そのなかでも江戸時代前期に江村専斎・伊藤宗恕によって書かれた『老人雑話』には、「賤ヶ岳の戦いは太閤一代の勝事、蟹江の軍は東照宮一世の勝事なり」と記されている。家康にとって、蟹江合戦での勝利がいかに大きな出来事であったかを物語っているといえよう。

(3) 鈴木兄弟の活躍

蟹江合戦で活躍した鈴木重安・重治兄弟は、佐久間家と親類関係にあった。兄弟の父である重宗が、蟹江城主・佐久間正勝の従兄弟であったとされる。

兄の重安は滝川軍の奇襲や前田種利の裏切りに抵抗し、蟹江城内にあった屋敷に立て籠もり奮戦するものの、戦死してしまう。このとき、重安は屋敷の近隣に火を放つことで狼煙を上げ、清洲城にいた家康に蟹江城での異変を知らせたという。

弟の重治は蟹江城を脱出して清洲へ向かう途中で家康に遭遇し、蟹江城が攻撃を受けたことを知らせた功績により、家康から槍を賜った。さらに蟹江合戦の後には、褒美として与えられた木材で屋敷を再建する。その後、鈴木一族は代々蟹江に居住することとなる。



家康より槍を賜る鈴木重治

(『海東郡史談』(明治26年)より)



『蟹江城址』石碑（大正4年建立）



『蟹江城本丸井戸跡』



『蟹江本町村絵図』（江戸時代後期）より

蟹江城は戦国時代末期に姿を消しているが、江戸時代に描かれた『蟹江本町村絵図』には、「古城跡」「古城堀」「城井」「古城橋」「南大手跡」「前田口」の表記があり、城の痕跡をたどることができる。

『蟹江城址』石碑は、大正4年（1915）、蟹江町教育会により建立されたもので、平成24年（2012）に少し西に移設され蟹江城址公園が整備された。なお、『蟹江城本丸井戸跡』が公園から西方へ30mのところに残されている。



蟹江町HP「おうちミュージアム」も見てね！

発行：蟹江町歴史民俗資料館